

かがやけ、野のいのち

農に生きる



星 寛治

ちくま少年図書館 99

社会の本



野のいのち

農に生きる

星 寛治



ちくま少年図書館 99

社会の本

616, 916/かがやけ, 野のいのち

著者略歴

1935年, 山形県に生まれる。米沢興譲館高校卒業。日本有機農業研究会会員, 高畠町教育委員長。著書に詩集『滅びない土』, 『鍬の詩』, 『北の農民 南の農民』(共著), 『農からの発想』がある。

筑摩書房/1986年初版

240pp/20cm/四六判



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

1986年3月15日 第1刷発行

著者 © 星 寛 治

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京(291) 7651(営業)

東京(294) 6711(編集)

〒 101-91/振替・東京 6-4123

Printed in Japan 厚徳社・和田製本

ISBN 4-480-04099-4 C 8061

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、本社読者係宛に御送付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

かがやけ、野のいのち

―農に生きる―



もくじ

序章

幼かったころ

野球に熱中

苦悩の高校時代

新米百姓しんまいひやくしやうのころ

小さな町の大きな集いつどい

育てる農業にかける

あったかい土

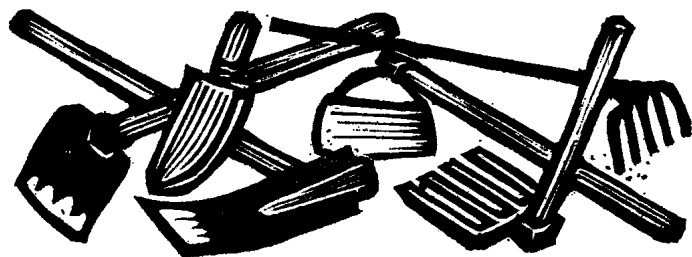
春

かた雪の上でせん定

黒い土の香りかお

牛のお産

47 46 43 37 29 24 19 16 13 9



|夏|

娘むすめの受験

種たねまきのころ

バカ苗なまぐさ騒動

百姓ひやくしやう志願しがんの若者わかものたち

リンゴの花満開

めんどりの体温たいふんがのこる卵

御領地ごりやうちの精神風土 　　たかはたの歴史①

田の草取りえんのうの援農

共にともつくりあげる関係

東大で百姓大座談会

選挙じゆんカーと娘むすめたち

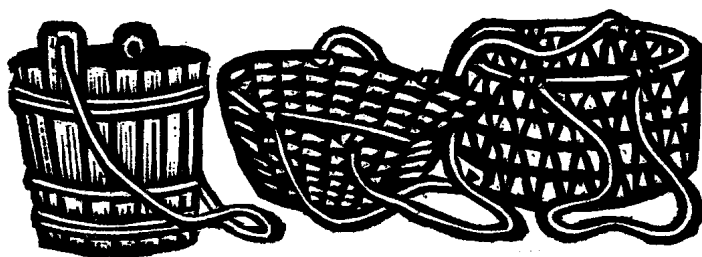
「こっちの水みづは甘いぞ」

ばん回ばんわいする稲いね

果物くだものの宝庫

106 102 99 95 88 82 79

73 71 69 64 60 56 50



|秋|

乾草ほしくさのにおい

ブドウ産地の風景

魔法まほうつか使いのような母

キャベツ畑の青ガエル

メキシコからの客

古代に思う

かてものの知恵ちえ

たかはたの歴史②

山吹色やまぶきいろのみのり

マツタケ狩がり

稲刈いねかりにきた医大生

リンゴの袋ふくろはがし

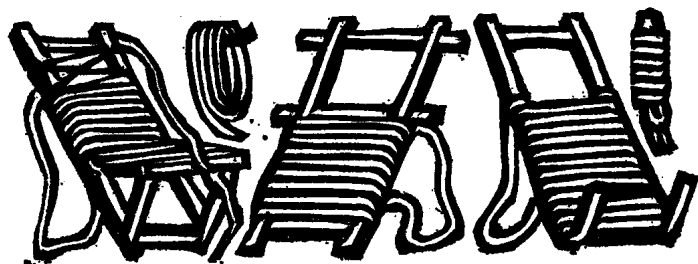
紅玉こうぎよくをつみとる

幻まぼろしの農民いづき一揆

落ち穂おぼをひろう子どもたち

155 150 146 141 137 133 131

126 123 119 117 114 111 108



|冬|

キビ餅、アワがゆ復活

つけ物の季節

鈴なりのふじりんご

凍みりんごの話

義民高梨利右衛門の風景

たかはたの歴史③

雪の中のくらし

雪の贈りもの

野の巨人逝く

充電したい時間

四国の子どもたちからの便り

満濃の子どもたちを訪ねる

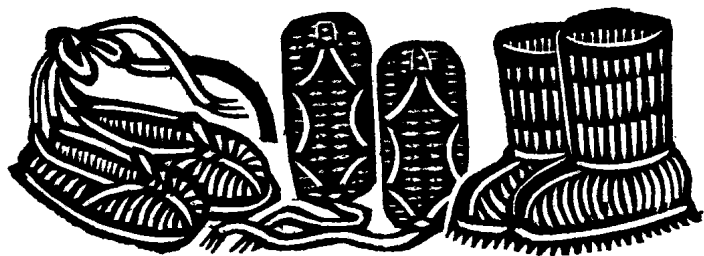
作付け会議

消費地を訪ねる

214 212 204 201 197 193 185 181

173

169 165 162 159



進取と反骨と

たかはたの歴史④

219

終章

農を継ぐ子どもたちに

四結会の村づくり

わが村はうつくしく

あとがき

239

236 232 229

絵・森田

純



序
章



列島の湖盆の里

ふかい土層をすき返し
つややかに命ふきこむ
黒牛の不退転のちから

みちのくの絹の道

背くらに荷駄をくくりつけ
南部牛のキャラバンが
ひたひたと峠をこえる

むかし都大路の石畳

車軸のきしみをほこらかに
歴史を引いた底力

いま さかまくハイウエーに

野の牛たちが勢揃いの
たりのたり
悠久の地歩をあゆみ出す

〔野にある牛〕の一部

幼かったころ

わたしの家は、東北の片田舎、山形県高島町でも山よりの村にある。百姓になって、すでに三〇年の歳月を生きてきた。ふとふりかえてみると、ずいぶん波乱にみちた足跡がつらなっている。

わたしは、村では中規模の農家の長男としてうまれた。田畑二・五ヘクタールほどを自作し、ほかに山林、原野を五ヘクタールほどもっていたが、第二次大戦後の農地改革のときに、平坦な原野はほとんど開拓地として解放されていた。当時の農家はみんなそうだったが、家族ぐるみ朝から晩まではたらいで、どうにかくらしが成り立った。

家屋は、三〇〇年も前にたてられた古いものだった。かんなもなかった時代だから、ちようなけずりの柱をつかった茅ぶきの曲り屋であった。中門造りと土地ではよんでいるが、その曲り屋のところにうまやがあった。わが家では、大正の終わり（一九二三、四年）ごろから、二、三頭の乳牛と、耕牛を一頭飼っていた。おなじ屋根の下で、牛と人

とが同居していたから、牛も家族の一員だという思いがあった。だから、牛が病氣になったり、お産をするときなどは、子どもたちまで気が気でなかった。そうしてうまれた子牛のかわいさは格別である。乳を飲ませたり、まぐさをやったり、背中にブラシをかけたりにして、一日一日、大きくなっていくようすを見つめていた。

祖父が赤牛にくらをつけ、牛車をひいて野良に出るときなどは、かならず追っかけて乗せてもらうのが楽しみであった。祖父はいっぱしの御者のように、細いヤナギのむちをあてると、牛はいきおいよく坂道をのぼった。たきぎなどを満載して家路をいそぐころ、牛も人も夕映えに染まった。そんな幼い日の情景が、ついきのうのように思いうかぶことがある。

あのはげしく、つらい太平洋戦争が終わったのは、わたしが小学校四年のときであった。父は山形の連隊に入営したが、戦地にはおもむかず、ぶじ帰宅できたのは、家族にとつてなによりの幸せであった。そのかわり父は、わかいころから村や町の役職を一身にせおつて、農業のかたわら地域づくりのために働きつづけて生涯を終えた。

当時は小学校でも、春の田植えと秋の稲刈りの季節に、農繁休暇、とよぶ休みが一〇日ほどあった。ネコの手も借りたい季節、子どもたちもたいせつな働き手だったのである。たとえば、代かきのさせご（牛をひきまわす役目）は、きまって子どもたちの仕事であつ



た。泥田どろたのなかを、牛の鼻づらを取って一日じゅうかけずりまわるのは、けっして楽なものではない。しかも、牛とさせごと、馬鍬まぐわを押おしている父との呼吸がぴったり合わなければ、代しろかきはうまく運ばない。子どもをあまくみる気性きしょうのあらい牛馬だと、あらぬ方向にかけ出したり、泥田どろたにすわりこまれたりしてしまふ。てこずって途方にくれていると、後ろの父に、「何をボヤボヤしているのだ」とどなられ、泣きたくなるときがあった。牛のはね上げる泥で、着物はおろか顔まで真っ黒になり、夕方、田から上がってくるときには、ほんとにくたくたであつた。

代かきが終わると、田植えがはじまつた。いまのように田植え機むかしなどなかった昔は、みんな手で植えた。低学年のころは、苗運びなえはこが子どもの役目であつたが、わたしは五年生のころから田植えの仲間入りをした。人海戦術で、一〇名ちかい人たちがいっせいにならんで植える光景は、いかにも五月さつきという感じがした。

なれない手つきで、わたしがまだ田んぼの三分の一も進まないうちに、大人たちはむこうの畦あぜに着いてにこにこしている。とりわけ父は、群ぐんを抜いて早かつた。右手が、まるでピストンのように上下する。そのためには、左指先でうまく苗を分けることがコツだ、と教えられるのだが、熟練じゅくれんした人と子どもでは勝負にならない。

父は、ただ早いだけでなく、正確に、うつくしく植えた。まさに田植えの名手だったの

である。その差は、わたしがやがて新米百姓しんまいびやくしやうになって、数年たつても縮まらなかつた。町會議員や民生委員などの公職をいくつもせおつて、外出がちになつてからも、帰宅するとすぐに作業着に着がえ、牛舎を見まわり、野良のらに出てきた。そんな父を、わたしはついに百姓としてのりこえられなかつたなど、いまでも思う。

家の前に大きなスモモの木が二本あつて、夏祭りが近づくころになると、小さい実があかく熟うれた。道ばたにボタボタ落ちてゐるスモモを、行き帰りの村の子どもたちは、みんな拾つて食べた。あるいはクワの古木によじのぼり、口を紫色むらさきいろに染めながら、腹はらいっぱいになるまでその実を食べた。

秋には、野イチゴや山ブドウのあまずっぱい香りかおをさがしてかけまわつた。クリの実をポケットにこぼれるほどつめて、夕焼けの野みちを帰つた。

野球に熱中

新制中学に入ると、子どもなりに、「ぼくは中学生なんだ」という自覚が自然にわいてきた。とはいつても、小学校校舎の家事室（いまの家庭科教室）などに机つくえをならべての授業

だったから、なんとなく小学校の延長みたいな雰囲気ものこっていた。ただ、いまでも印象的なのは、昼の時間にいっしょに弁当を食べ、そのあときまって世界の名作を読んでくださる担任の先生のことである。たとえば、『クオレ物語』『小公子』『レ・ミゼラブル』などを、先生自身が涙をボロボロこぼして読んでくださった。また、日本古来の物語を、毎日じつくりと語り、で聞かせてくださる女の先生の表情もわすれられない。

わたしは体格もふつうで、運動神経もあまり良いほうではなかったが、野球がむしろ好きで、布のグローブや手製のバットで、いつも草野球をやった。野原や、稲刈りのあとの田んぼが、特設の野球場なのである。子どもたちといっしょに、青年も大人たちも混じって、みんな夢中になって走りまわった。だいたいボールが草むらに飛んで、さがすのに一苦労することもしばしばだった。もちろん、今のようにユニホームをそろえることなどできなかったから、若者も野良着、地下足袋のままであつまってきた。

わたしは、下手の横好きのような感じで野球部に入り、中三のときにレギュラーになった。主にリリーフ投手をやったが、速球の主戦投手が荒れてくると、たびたび登板の機会がまわってきた。わたしのほうは軟投型で、スローカーブを多投した。打球が、ほとんど内野ゴロになるのが、われながらふしぎであった。町大会、郡大会などで勝ったときの感激は、いまでもわすれられない。父兄や地域の人たちが、それこそ泣きながら応援してく